

空飛ぶ新たなチカラ 東北の木材を使ったサステナブルな燃料



1

国土の約3分の2を森林が占める日本において、「木」は身近な存在であり、寺社や住宅、公共建築などに古くから利用されてきました。そして今、この「木」を原料に燃料を作る動きが始まっています。

森から生まれる次世代の燃料

その名は「森空（もりそら）プロジェクト」。持続可能な航空燃料（SAF = Sustainable Aviation Fuel）向けに、国産木材からバイオエタノールを製造し、脱炭素社会に貢献していくという取り組みです。2023年2月に日本製紙、住友商事、Green Earth Instituteの3社によって発足し、今年3月にJALグループとエアバスが参画しました。燃料の作り手と使い手の双方が連携することで、国産SAFの普及・拡大を推進していきます。

SAF製造を軸に東北を支援

スローガンは「森のチカラを空飛ぶチカラに」。現在、日本製紙の岩

今回のテーマに該当する目標



SAFとは？

廃食油、農産物の非可食部分、森林残渣や端材（製材残材）などを原料とした航空燃料。これらの原料の生産・調達から、製造、輸送、燃焼までのライフサイクルにおいて、原油のみを原料とする航空燃料よりもCO₂排出量を約80%削減できます。



4

1. バイオエタノールの原料にもなるチップの山。日本製紙の岩沼工場（宮城県）にて。2. 福島県浪江町内で試験植樹に参加するJALグループ社員。3. 写真左から順に、チップがパルプ、発酵培養液の形態を経て、バイオエタノールに。4. 用途が広がる端材（製材残材）。



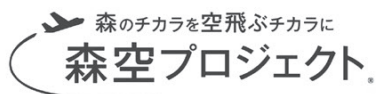
2



3

沼工場を拠点に、東北の製材所から集めた木質バイオマス（丸太から製材を切り出した後に残る端材チップ）を原料とするバイオエタノールを製造する準備が進んでいます。同時にエリートツリー（成長が早く花粉の放出量が少ない品種）の植樹を進め、森林資源の循環と維持にも取り組んでいます。国産SAFへの利活用を軸としながらも、東北の木を「伐って、使って、植えて、育てる」森林循環を進め、林業に関わる雇用創出に寄与し、「東北のチカラに」なることも森空プロジェクトが目指すところです。

JALグループは2030年度に全燃料の10%をSAFに置き換えるという目標を掲げていますが、こうした需要に対して国産SAFの原料不足が課題となっています。国産木材の活用はその打開策のひとつであり、地域の活性化にもつながることから、事業化の早期実現が期待されます。改めて注目の高まる「木」を足がかりに、JALグループは国産SAFの普及と、持続可能な社会の発展に努めてまいります。



SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

2015年9月、全国連加盟国(193カ国)により「持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals: SDGs)」が採択されました。2030年までに、貧困や気候変動、平和的社会などの17の目標を達成すべく、JALグループも社会の課題解決に取り組んでいきます。